

# 後水尾法皇と隠元

## —三平瑞木像をめぐる—

楊 慶 慶

### 1. はじめに

承応3（1654）年、中国明末清初の高僧隠元隆琦（1592-1673）が日本に渡来した。寛文元（1661）年、京都宇治で黄檗山萬福寺を建立し、日本黄檗宗の開祖となっている。後水尾法皇（1596-1680）は生涯を通じ実際に隠元と面会したことは一度もなかったが、寛文7（1667）年11月7日、隠元の嗣法の弟子たる龍溪性潜<sup>(1)</sup>（1602-1670）に帰依したことによって、黄檗の法脈を受け継いだ。本稿では先行研究にあってこれまで余り触れられていない法皇の念持仏・三平瑞木像について取り上げ、法皇と隠元の関わりを新たな視点から考察する。

この三平瑞木像は、形式上は釈迦如来の坐像であり、三平瑞像とも呼ばれている。中国福建省三平山の唐時代の義忠禅師が植えた、900年以上の樹齢のある檜の木から彫刻された三十余尊の瑞像の中の釈迦像である。隠元は日本へ渡来した翌年の1655年、許欽台<sup>(2)</sup>からこの像を贈られた。隠元はこの像を法皇へ献上した。延宝2（1674）年、法皇は泉涌寺に宝殿（妙応殿）を建立し、この像を安置した。現在も泉涌寺で所蔵されている。

後水尾法皇と隠元の関わりに関する先行研究<sup>(3)</sup>で、三平瑞木像のことを論じる論文は決して多くはない。そうした数少ない先行の中でも、西谷功氏は「近世泉涌寺の再建—伽藍復興と精神の回帰<sup>(4)</sup>」はとりわけ依拠するに値しており、同氏の泉涌寺への造詣を踏まえた簡潔な言及がなされている。すなわち、西谷氏は本像を「延宝2（1674）年に泉涌寺内に安置された隠元隆琦請来の「三平瑞木像」と伝わる釈迦如来坐像」と規定している。同氏はまた、「近世天皇家の

念持仏一泉涌寺奉安の仏像を中心に<sup>(5)</sup>にあっては、この像が法皇の念持仏として泉涌寺へ下賜された結果、「さらに黄檗僧の来山が活発になり、親交を深めていく」と指摘している。錦織亮介氏は「陳賢研究—作品と史料」では、「三平山の三十余尊の瑞像とは、釈迦像にはじまる列祖像のことではないか」と推測している。そのほか、桑野梓氏の執筆した図録『浜松にもたらされた黄檗文化<sup>(7)</sup>』に見る「隠元禅師のもたらした仏像」というコラムでは、この像の姿かたちを詳細に紹介するとともに、その由来についても紹介している。そこでは本像が単に隠元の「如法」の仏像としてだけでなく、靈驗性のある「瑞像」としても捉えられている。また、小泉恵英氏の執筆した図録『黄檗 京都宇治・萬福寺の名宝と禅の新風<sup>(8)</sup>』の関連項目にあっても、本像の姿や由来を紹介している。

以上の概観により、三平瑞木像の由来はある程度明らかにされたものと考えられる。ただ、どうして隠元がこの像を法皇へ献上したのか、また、法皇がどうしてこの像を泉涌寺に安置したのか、など、この像が法皇と隠元にとってどのような意味があるのか、といった点については、先行研究ではまだ深く論じられていない。本稿では先行研究を踏まえ、関連する第一次資料を読み解くことにより、以上の問題をめぐって考察を行う。

## 2. 三平瑞木像の由来

三平瑞木像（以下、「本像」と略称）は高さ<sup>(9)</sup>が26.6センチメートルの、仏像としては小さな像である。隠元は許欽台から本像を贈られてのち、「三平瑞像<sup>(10)</sup>」という讚の「引」（小序）において、本像の由来を以下の通り詳述している。

夫物久必靈、相円則瑞。而我文仏有<sup>(11)</sup>三<sup>(12)</sup>十種好<sup>(13)</sup>、西方教主十六觀門、皆靈瑞之相也。吾閩丹霞南靖<sup>(14)</sup>三平開山義忠禪師親植<sup>(15)</sup>檜樹、迄<sup>(16)</sup>今九百餘年、枝幹尽枯、唯檜身存焉。望<sup>(17)</sup>之猶有<sup>(18)</sup>生色。漳中士民誠心禱<sup>(19)</sup>之、或求<sup>(20)</sup>三寸許<sup>(21)</sup>、罔<sup>(22)</sup>不<sup>(23)</sup>遂<sup>(24)</sup>願、每歲祈者不<sup>(25)</sup>啻千萬。愈截如<sup>(26)</sup>故。已丑歲、法

弟亘公重興<sub>二</sub>殿宇<sub>一</sub>、欲<sub>レ</sub>広<sub>二</sub>其居<sub>一</sub>、慮<sub>二</sub>此樹為<sub>レ</sub>碍<sub>一</sub>、遂ト<sub>二</sub>於祖<sub>一</sub>、果許<sub>レ</sub>斫<sub>レ</sub>之。命<sub>レ</sub>匠雕<sub>二</sub>成三十余尊<sub>一</sub>、當代官長争請供養。余聞不<sub>レ</sub>勝<sub>二</sub>渴仰<sub>一</sub>。甲午至<sub>二</sub>扶桑<sub>一</sub>、又慕不<sub>レ</sub>已。<sup>(16)</sup>乙未夏中左欽台許公特人間候、唯獻<sub>二</sub>此相<sub>一</sub>。<sup>(17)</sup>窃為符<sub>二</sub>我所願<sub>一</sub>、或余之片誠召<sub>二</sub>感義忠禪師之所<sub>一</sub>、賜歟。<sup>(18)</sup>(後略)

この叙述から、およそ次のことが知られる。まず、本像は決して、どこにでもある平凡な木で彫刻されたものではない。本像は実に福建省彰州市南靖県の三平寺の開山義忠禪師によって900年前に植えられた檜の木を材料として彫刻されたものである。この檜の木は、本像製作当時すでに樹身だけを留めていたが、なお生き生きとしており、彰州の士民も心からこの檜に祈り、たといほんの一片であっても手に入れて願いを込めれば、その願いはかなわないことがなかった。毎年祈る者は千万人とどまらなかったが、そうした数多くの人々へ切って与えても、そのつど元通りとなった。このように、福建省漳州の士民らはこの木に靈験のあることを広く信じており、このような靈木を植えた義忠禪師に対しても、同様に深い信仰を寄せていた。

また、1649年、隠元の法弟・亘信行弥(1603-1659)は、同寺の殿宇を広げようとしたが、その際、この木が邪魔となった。そこで亘信が祖師へ祈って占ったところ、幸いにも木を切ることが許可された。亘信は切った木を材料として、仏師に三十余尊の仏像を彫刻させた。すると有力官吏らが争ってこの像を供養した。以上が、本像製作の経緯である。

冒頭、「物久必靈、相円則瑞」として、隠元は本像に靈瑞があることを信じていることと表明し、この靈木から彫刻された本像にかねて憧れており、日本へ渡航して以後も心に慕ってやまなかったが、幸いにも有力官吏の一人である許欽台からその実物を贈られて、自分の念願がやっとかなったものと喜んだ。そして、これこそは義忠禪師が自分の真心に感応してくださった結果だと信じた。つまり、隠元自身も義忠禪師に対する信仰を終始深くいっていたのである。

### 3. 福建省の民間信仰・三平祖師信仰

それでは一体、義忠禪師に対する信仰とは、どのような信仰であろうか、その由来と特徴に関して考察する。隱元の故郷の福建省にあっては、いわゆる「三平祖師信仰」という民間信仰が行われていた。この「三平祖師」とは、すなわち唐代の義忠禪師（781? -872、以下敬称略）を指している。義忠は俗姓を楊氏といい、本籍地は高陵（今現在の陝西省咸陽高陵県）である。ただ、父親が仕事のため福建省へ赴任した結果、義忠は福建省の福唐（今の福建省福清市）で生まれている。この地はすなわち、隱元の生地でもあり、隱元が同郷の高僧へ敬意と信仰をいただいたのもごく自然なことであったと言えよう。さて義忠は、14歳で宋州の玄用律師にしたがって出家、27歳で具足戒を受けた。そしてまず百岩懷暉に参じ、ついで西堂智藏、百丈懷海、石鞏慧藏ら唐代を代表する有名な禪者に参じ、最後に大顛宝通に参じて得法した。宝曆（825-827）の初め頃、義忠は漳州へ赴いて、法を弘めたが、その際には常に三百余人が門下として集まっていた。この漳州には三平山という山があるが、会昌5（845）年、武宗による破仏に際し（いわゆる「会昌の廢仏」）、義忠はこの混乱を避けて三平山の奥に隠居した。そこで、三平寺を創立し、引き続き法を弘めた。大中元（847）年、宣宗皇帝の時、仏法が復興されたため、漳州刺史・鄭薰からの要請により、漳州開元寺の住持となった。そして、咸通13（872）年11月6日、92歳で示寂した。<sup>(19)</sup>

『祖堂集』巻5および『景德伝灯録』巻14などにおいても、禪の高僧として、義忠の事跡と二三の機縁語が記録されている。本稿はそうした禪思想の視点からではなく、福建の民間信仰という角度から、彼にまつわる後代の人々の信仰、すなわち上記の「三平祖師信仰」を考察する。

福建におけるさまざまな民間信仰の歴史は長く、4000年前の時点で既に原始的な宗教が存在していたことが考古学的な発見から知られており、秦漢以前には靈魂不死やトーテム崇拜、祖先崇拜など様々な信仰形態が見られた。三国時代になると、道教や仏教などがこの地へも伝来し、同地にもとからあった宗

教へ多大な影響を及ぼした。ただ、従来の民間信仰は消えることなく、それらと衝突・融合しながら今日まで続いている。特に、晩唐から宋にかけて、福建では地方政権たる閩のもと、比較的安定した治世が続き、社会・経済・文化といった諸方面で繁栄していた。宋代も中期に入ると、朱熹（1130-1200）のような大思想家たちも輩出し、かくて道教や仏教も迅速な発展を遂げていた。こうした流れの中で、百丈、黄檗、雪峰、玄沙等といった禅の名僧も輩出した。このように、福建は仏教の中心地となった一方で、民間信仰の聖地としても栄えていた。その結果、いつしか福建本土、または福建に関係のある人物や自然物を神格化するという、一種の造神運動が形成された。<sup>(20)</sup> 具体的には、賢人崇拜、巫道崇拜、母性崇拜、医神崇拜、禅師崇拜、清廉官吏崇拜等があげられる。義忠はここに見る禅師崇拜の中でも、とりわけ影響力の大きい一人であった。民衆はいわゆる「禅師」に妖魔を退治する能力があるものと信じていた。彼らもまた民衆からの期待に応えるため、巫師や道士と同じように、雨乞いや占い、妖魔退治といった加持祈祷的なことに手を染めるに至った。そしてこうした「禅師」らは死後、巫師や道士が神霊として祀られるのと同じように、「菩薩」として祀られるようになり、かくていわゆる「禅師崇拜」が生まれたのである。<sup>(21)</sup>

また、福建省は中国の中原地域からは離れた南東地方に位置する。その南東地方は海に臨み、反対に、北西、南西、北東地方は山岳地帯が多くを占める。そこでは、漢民族と少数民族とが混住している。義忠は武術も堪能であったため、「蛮獠」と呼ばれる少数民族や、「大毛人」または「毛人」と呼ばれる原始的な諸民族をごく容易に征服してしまい、義忠は彼らに「麻の耕作と紡績の知識を教え」るだけでなく、医術にも精通していたため、「病気を診断して的確な治療を施して、多くの人を助けた」という。このように、当地の人が義忠禅師を菩薩と崇めるにつれて、関連するさまざまな伝説も生まれ、伝えられていったのである。その結果、漳州三平寺の開祖・義忠は人々から「三平祖師」として神格化されていた。かくて、「今に至るまで、多くの信者が三平寺の薬籤（引用者注：用いるべき医薬品や就くべき医師について教示するおみくじ）を求め

に來、奇病難病を治そうとして、香火はますます盛んとなっている」のである。<sup>(22)</sup>  
 このような三平祖師信仰は多くの地域に大きな影響を与えている。福建省ばかりか、福建出身の華僑が多く住まう台湾、香港、澳門、東南アジア、果ては遠く欧米においても、華僑コミュニティを中心として、毎年、五、六十万人に達する参拝者が三平祖師殿へ参詣している。こうして見ると、三平祖師信仰が福建における重要な民間信仰の一つであることは明らかである。<sup>(23)</sup>

前述したように、福建省は山の多い地方であり、しかも温帯多雨の気候であり、山々には植物が生い茂っており、大木もまれではない。そうした樹齢千年以上をへた古木には精霊が宿るものと一般に信じられている。義忠が植えた檜の木を材料として三十余尊もの仏像が彫刻されたということの背後には、義忠禪師崇拜・樹木崇拜・仏像崇拜という三種類の崇拜がこめられている。その結果、上に引いた「當代官長争請供養」という隱元の言葉からも窺われるように、社会的には上層に位置する人々が、さまざまな祈りを込めて、かつは大きな靈験を信じ、争ってこれら尊像を供養したのである。隱元の三平祖師に対する、日本渡来後も衰えることなき信仰もまた、こうした福建社会における宗教信仰を忠実に反映していよう。

#### 4. 隱元の三平祖師信仰

前述したように、隱元は三平祖師信仰を深く持っていたことが分かる。隱元は中国時代の有力信徒であった許欽台から三平瑞木像を贈られたことに感動して、前述の「三平瑞像」という讚に小序の後に次のような四言句のみから成る詩偈を著した。

觀<sub>レ</sub>彼瑞相<sub>一</sub>、隔<sub>二</sub>五千程<sub>一</sub>。至心誠意、感応道成。慈<sub>二</sub>蔭娑婆<sub>一</sub>、相好<sup>(24)</sup>  
 光明。隨<sub>レ</sub>念即至、法運中興。一瞻一礼、徹<sub>二</sub>證無生<sub>一</sub>。<sup>(25)</sup><sup>(26)</sup><sup>(27)</sup>義天独朗、忠膽<sup>(28)</sup>  
 同靈。灯灯相続、萬古三平。

これによれば、この像は五千里もの遠距離にある中国から、まごころを込めて求めた末に「感応道交」でもたらされたものだという。ここには「感応道成」という言葉が使われているが、この言葉は実は「感応道交」から転じた表現である。「感応道交」とは「衆生が仏心を感じ、仏力がこれに応じるのを感応という。道交とは行き交わること。即ち感応道交とは衆生の感と如来の応とが互いに相通じ相交わること<sup>(29)</sup>」という意味であるのに対して、「感応道成」の「成」とは、「成立すること、成就すること、完成すること、成仏すること」などの意味を帯びており、感応の結果のほうに力点が置かれている。すなわち隠元は、本像が「感応道成」によって自己へ賜わったものだと信じている。さて、本像は俗世界を庇護しつつ、光りを放っている。本像は自分の強い念によって日本へもたらされたものであり、同様にして、仏法も日本で再び輝きを放つであろう、という主旨である。隠元が自己の日本での弘教活動が本像に象徴された三平祖師によって護持されていることを信じているのである。また、篇末にいう「義天独朗、忠膽同霊」の二句では、それぞれの冒頭の字「義」「忠」を合わせて、「義忠禅師」を指すよう意図している。およその意味は義忠の廣大無辺な禅学思想が群を抜いて明晰であり、それでいて法脈上の祖師に対し忠実で、心を同じくしていた、ということを示している。ここにいう「灯灯相続、萬古三平」とは義忠の法脈が脈々と受け継がれたことを指す以上に、むしろ義忠の精神と同時に同師への人々の信仰、すなわち三平祖師信仰もまた途絶えることなく存続されるようにという祈念の意が示されているのである。隠元が福建時代以来、東渡ののちも三平祖師信仰を大切にしていたということが明瞭にうかがわれる。

さて、隠元がかくも大切にしていた本像は、現在では泉涌寺に所蔵されている。どうして萬福寺ではなく、宗派を異にし、しかも皇室と深い関わりのある泉涌寺に安置されるに至ったのか。この点に関して、2019年7月12日、筆者は泉涌寺で現地調査を行った。泉涌寺や塔頭たる戒光寺から関連史料の閲覧を許可していただいた上で、泉涌寺心照殿学芸員・西谷功氏から『三平山瑞木記

并偈頌』(2巻)〔「泉涌寺文書」E-46-1.2〕と『天圭和尚并湛慧長老伝』(1巻)〔「戒光寺文書」F-02〕という2点の新出資料を見せていただいた。これらの新出資料によって、三平瑞木像が泉涌寺に所蔵されるまでの経緯が知られる。

まず『三平山瑞木記并偈頌』とは、黄檗僧の木庵・慧林・南源・独吼ら(いずれも隠元の唐僧弟子)がこの像を拝した際に残した詩偈をまとめたものであり、黄檗僧の親筆の墨蹟のあるオリジナルテキストである。その中から今回は南源性派の製作した「三平瑞像頌」の引(小序)を見よう。

黄檗開山本師隱老和尚説<sup>(30)</sup>法普門<sub>二</sub>時、温陵檀護欽台許公特書致<sub>レ</sub>候、獻<sub>二</sub>三平瑞像一尊<sub>一</sub>、梵製精嚴、觀在起<sub>レ</sub>敬、而師喜從<sub>レ</sub>天降、窃符<sub>二</sub>夙慕<sub>一</sub>。尋奉<sub>二</sub>丈室<sub>一</sub>隱<sub>レ</sub>身供養。有如<sub>二</sub>優曇再現<sub>一</sub>、仏日移<sub>レ</sub>東也。迄<sub>二</sub>癸丑暮春<sub>一</sub>、覺<sub>二</sub>化功將円<sub>一</sub>、預先謂<sub>二</sub>派等<sub>一</sub>曰、是像感応道交、萬里降臨、大有<sub>二</sub>法縁<sub>一</sub>、非出偶爾矣。日可代<sub>レ</sub>吾上<sub>二</sub>進太上法皇<sub>一</sub>、以表<sub>二</sub>末後<sub>一</sub>、云誠是老僧之祝也。派等再拜敬。(後略)(返点・句読点筆者)<sup>(32)</sup>

この叙述からおおよそ次のことが知られる。まず、この資料では、師の隠元は普門寺で弘法する時、福建泉州の有力檀徒であった許欽台からこの像を贈られたことを伝えている。

また本史料には、隠元が示寂に先立ち本像に関して特に示した遺囑も記録されている。すなわち、本像の作風は精緻莊嚴であり、それゆえに隠元は礼拝のたびに尊敬の念を生じ、天から降るような法悦を覚えた。そして心ひそかに平素の願望が実現されたものと喜んだ。隠元は本像を大切に奉安し、これを念持仏として自己の住まう方丈の一室で供養してきた。けれども癸丑(1673年)暮春に至って、隠元はいよいよ今生での教化も円満なる終着点に近づいたものと自覚し、南源性派などの弟子らへ以下のように告げた——「このお像は、感応道交の結果、万里のかなたから降臨したものであり、我らとは大いに法縁がある。単なる偶然で得られたものではないのである。この際どうか死にゆく私

に代わって太上法皇に進呈してもらいたい」と。

以上の叙述から、隠元は本像への久しきにわたる崇敬の念、加えて義忠すなわち、三平祖師信仰をもいれていた、ということが理解される。そして、遠く日本にいる隠元が本像を供養するという不思議な因縁を得たこともまた偶然ではないと回顧している。それは「仏日移東」という句によって、隠元が日本に渡来する因縁を結べたのもひとえに義忠禅師に見守られ、祝福されたためだと確信していたことから理解されよう。

本稿においてもっとも注目すべき点は、本引の最後に示された、隠元は示寂に先立ち、法皇への祝福をふくめた最後の別れを告げ、かつは恩義を謝すべく、自分が長年にわたり大切にしてきた三平瑞木像を法皇へ献上するように弟子に指示した点であろう。以下、章をかえて考えてみたい。

## 5. 隠元が三平瑞木像を法皇へ献上した意図

それではどうして、隠元は三平瑞木像を法皇へ献上したのか、ただ単に告別の意のみを込めたものだろうか。その経緯について、法皇の黄檗接触以前からの信仰や、法皇と隠元との関係といった点からさらに考察してみたい。

寛永6(1629)年、34歳の後水尾天皇は女一宮(興子内親王、すなわち明正天皇)に譲位した。そして、慶安4(1651)年、56歳で、相国寺の昕叔顕暲(1611-1658)について落髪し、法号を円浄と称する<sup>(34)</sup>。譲位後の法皇は、いっそう多くの禅僧に帰依している。昕叔顕暲をはじめ一糸文守(1608-1646)、その師沢庵宗彭(1573-1646)、鹿苑寺鳳林承章(1625-1668)、妙心寺の雲居希膺(1582-1659)、愚堂東寔(1577-1661)、龍溪性潜らが挙げられる。さらに、泉涌寺の如周正専(1594-1647)・天圭照周(1616-1700)ら、真言と律とに兼ね通じた人々も挙げられる。この中でも、特に注目すべき禅僧が、妙心寺の龍溪である。

## 5-1 龍溪が隱元に嗣法する

龍溪は妙心寺の前任持である。隱元が渡来する三年前、龍溪は偶然の機会に『<sup>(35)</sup>隱元録』を読んで以降、隱元への尊崇の気持ちを持つようになっていた。既に日本は鎖国して久しかったが、貿易を通じ、隱元の語録はもたらされていたのである。隱元の渡来は、良き師を久しく求めていた龍溪にとって、さながら干天の慈雨のようであった。このようやくにして出会った師・隱元を日本に引き留めるために、龍溪は何度も江戸へ往復し、幕府当局との間に立ち、奔走した結果、隱元は「幕府から扶持米の支給をうけ、特に江戸に下って將軍家綱に謁し、大老・老中らとも直接関係が生ずるようになった<sup>(36)</sup>」のである。後には、龍溪の斡旋で、幕府から京都宇治に寺地を与えられ、一寺を開創するまでに至った。つまり龍溪こそは、その後半生を挙げて黄檗宗の開立に尽力したキーパーソンであった。

寛文4(1664)年1月19日、龍溪は法皇と深い関わりのある正明寺からの請に赴くに際し、隱元の法を嗣いで黄檗僧となった。つまり、隱元の法を日本僧として最初に受けついで、臨済正伝三十三世となったのである<sup>(37)</sup>。『普照国師年譜<sup>(38)</sup>』の寛文4年甲辰の条には、「師七十三歳春付<sup>(39)</sup>龍溪潛<sup>(39)</sup>」と書かれている。また、『黄檗和尚太和集<sup>(40)</sup>』に収録されている「付法機縁」には、隱元からの付法の様子が次のように詳しく書かれている。

「甲辰正月十九日、龍溪西堂応<sup>(41)</sup>江州正明寺請、臨<sup>(41)</sup>行進<sup>(41)</sup>方丈<sup>(41)</sup>拜辞。師拳<sup>(41)</sup>扠子<sup>(41)</sup>云：只這一脈、從<sup>(41)</sup>龍池<sup>(41)</sup>流至<sup>(41)</sup>黄檗老僧<sup>(41)</sup>、三十年用不<sup>(41)</sup>尽、今示<sup>(41)</sup>於汝<sup>(41)</sup>。汝能行持、如<sup>(41)</sup>龍得<sup>(41)</sup>水、如<sup>(41)</sup>水得<sup>(41)</sup>龍、只如<sup>(41)</sup>興<sup>(41)</sup>波不<sup>(41)</sup>作<sup>(41)</sup>浪一句<sup>(41)</sup>作麼生道。堂云：消<sup>(41)</sup>得龍王多少風<sup>(41)</sup>。師云：舌卷<sup>(41)</sup>波濤<sup>(41)</sup>平<sup>(41)</sup>四海<sup>(41)</sup>、心空<sup>(41)</sup>沙界<sup>(41)</sup>一乾坤。便付云：接<sup>(41)</sup>得龍池真正脈<sup>(41)</sup>、為<sup>(41)</sup>霖為<sup>(41)</sup>雨徧<sup>(41)</sup>山川<sup>(41)</sup>。(後略)

甲辰(1664)1月19日に、龍溪は江州正明寺からの請を受けた。同寺に赴

くにあたり、隠元に別れの挨拶に赴いた。その際隠元は弘子を挙げつつ、龍溪に対し次のような付法の言葉を語ったのである。「この一脈は龍池（筆者注：龍池禹門寺に住まった、隠元の法脈上の曾祖父・幻有正伝）から黄檗老僧（筆者注：隠元）のもとへ流れ、三十年をへてもなお使いきれないが、これを今日あなたに示す…（中略）…龍池の真の正脈を接得し、霖となり雨となり山川に徧〔遍〕し」とあり。龍溪の付法の具体的な日時と状況を知ることができる。寛文9（1669）年4月8日、隠元からの専使によって、龍溪へさらに源流・伝法衣が齎された。これを承けて龍溪は、示衆小参を行い、名実共に黄檗最初の日本人嗣法者となった。<sup>(42)</sup>

ここで年代的には明治後期に成った『黄檗宗派原由』の「人皇百九代後水尾天皇」の項によれば、「隠元祖西来今を経て十載、而も此土に於て龍溪師髓を得ると称す、上、天聴に達して、法皇大に悦ぶ、勅諭に云く、隠老禅師は即ち達磨にして、龍溪は乃ち二祖なり<sup>(43)</sup>」と記録されている。この記録によれば、隠元は龍溪が自己の法の神髓を得、かつはその法脈を受け継いでいることを認めている。そして法皇もまた隠元を達磨に、龍溪を二祖に擬え、隠元の法脈の正統性を認めつつ、高く評価しているのである。

## 5-2 法皇が龍溪に嗣法する

寛永13（1636）年4月13日龍溪は愚堂東寔に随従して参内し、法皇と初相見した。龍溪は法皇から紫衣を賜わり、二度妙心寺へ勅住した。その後も、法皇からしばしば宮中に召され、『臨濟録』『円覚経』『碧巖録』など重要な禅宗文献を進講している。この時、法皇が筆記した手帳が今も東山文庫に保存されている。<sup>(44)</sup>寛文7（1667）年11月7日、法皇は龍溪に嗣法し、謝法の宸翰を賜った。この宸翰によれば、法皇は、「雖<sub>レ</sub>然見徹更不<sub>レ</sub>疑謬、争奈未<sub>レ</sub>能<sub>三</sub>慶<sub>二</sub>快平生<sub>一</sub>矣」とあるように、それまでいろいろ参じたが、まだ徹底的に悟ることができていない様子であった。しかしながら、幸いにして、龍溪から「柏樹子の公案」<sup>(45)</sup>を授けられた結果、法皇はこの公案によって頓悟した。これを承けて黄

槩宗僧侶の嗣法を示す『黄檗宗鑑録』には、他の僧侶らと区別して特に一ページを設け、以下のような記載を認める。<sup>(46)</sup>

三 十 四 世	寛文 七年丁未 十一月 七日
	後水尾院太上法皇
	號 圓淨 法諱 道覚 嗣龍溪潛

つまり、隠元→龍溪→法皇という系譜で、法皇は黄檗の法脈を継承したのである。それだけでなく、龍溪は隠元が編纂した授戒儀軌『弘戒法儀』<sup>(47)</sup>によって、法皇をはじめ皇女方に授戒した。<sup>(48)</sup>この点からも、黄檗の一脈相承を重んずる様子がうかがえる。寛文9(1669)年9月20日、法皇は龍溪へ大宗正統禪師の号を賜り、従来提唱の『法輪請益録』を『宗統録』と改題し、さらに『御版宗統録』<sup>(49)</sup>の題で板行した。その際、御製序をも書き与えている。このことから、法皇は隠元の法を受け継いだ龍溪の法に対し、その正統性を認めていることが知られる。

### 5-3 法皇と隠元の深い関わり

二度の元寇を経験した後宇多天皇の遺勅により、鎌倉後期以降、外国僧の天皇への謁見が停止され、それが慣例化したためか、法皇は隠元と一度も面会したことがなかった。<sup>(50)</sup>しかしながら、寛文3(1663)年5月25日、龍溪を通じて、法皇は隠元に禅の法要を問うた。このことがきっかけとなり、法皇は隠元と深い関わりを持つようになった。隠元は法皇への書簡の中に、法皇への法語以外にも、二首の詩偈を捧げている。その中の一首は七言律詩であり、次のような内容である。

心無<sub>レ</sub>城府<sub>二</sub>道無<sub>レ</sub>方、扇<sub>二</sub>起宗風<sub>一</sub>大法皇。靈鷲枝花重再振、扶桑正脈永流<sub>レ</sub>芳。

為<sub>レ</sub>祥為<sub>レ</sub>瑞臨<sub>二</sub>家國<sub>一</sub>、成<sub>レ</sub>聖成<sub>レ</sub>賢壯<sub>二</sub>帝郷<sub>一</sub>。法運東興自<sub>二</sub>此日<sub>一</sub>、珠回

玉<sub>(51)</sub>転燦<sub>二</sub>文章<sub>一</sub>。

「靈鷲枝花」は、釈迦が靈鷲山で禅宗の起源を説いたとされる寓話「拈華微笑」から来ている。ここでは禅宗自体を指している。前半四句の大意は、法皇のおかげで、釈迦の遺教たる禅宗が再興され、中国禅の正脈が日本でも連綿と受け継がれてゆくであろう、というものである。

延宝元（1673）年3月、隠元の病状が重くなった。そこで同月30日、法皇は使を遣わして慰問し、これに対し隠元は、以下のような謝恩の偈を奉った。

廿年行化寓<sub>二</sub>東方<sub>一</sub>、屢受<sub>二</sub>洪恩<sub>一</sub>念不<sub>レ</sub>忘。珍重上皇增<sub>二</sub>寿算<sub>一</sub>、西来正  
法仗<sub>(52)</sub>敷揚。

この詩偈の中で、隠元は「自分がここ日本で二十年にわたり教化した間、法皇からはしばしば御恩を受けており、それを終世忘れられない」という謝恩の念を表明している（前半二句）。それだけでなく、自分の人生の最期にあって、「法皇の御長寿を念じつつ、自分亡きあと、中国からの正法を一層広めて頂きたい」という要請を込めている（後半二句）。

隠元が危篤と聞いた法皇からは、「師者国之宝也、倘世寿可<sub>レ</sub>統、朕願以<sub>レ</sub>身代<sub>レ</sub>之<sub>(53)</sub>」という嘆きが伝えられた。つまり、「自己の寿命を削ってでも隠元の寿命を延ばしたい」という意味であり、ここには法皇から隠元への深い感情や崇敬の念がうかがえる。

かくて4月2日、法皇は隠元に大光普照国師の号を授けた。そしてその翌日、隠元は示寂している。国師号授与に際し、以下のような勅書が黄檗山へ寄せられている。

勅

朕聞、臨濟之道徧行<sub>二</sub>天下<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>天童双径<sub>一</sub>、光輝益盛、唯我日域、久

乏<sub>二</sub>宗匠<sub>一</sub>、幸黃檗隱元琦和尚、受請東來、重立<sub>二</sub>綱宗<sub>一</sub>、闡<sub>二</sub>揚濟道<sub>一</sub>、大光<sub>二</sub>於國<sub>一</sub>、功不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>磨、朕屢沾<sub>二</sub>法乳<sub>一</sub>、簡在<sub>二</sub>朕心<sub>一</sub>、故特賜<sub>二</sub>大光普照國師之号<sub>一</sub>、以旌<sub>二</sub>厥德<sub>一</sub>、欽哉、故論。  
<sup>(54)</sup>  
寛文十三年四月二日

この勅書の中で、法皇は隱元の渡来によって日本の臨濟禪が振興されたことを大いに肯定している。そしてまた、「朕屢沾<sub>二</sub>法乳<sub>一</sub>、簡在<sub>二</sub>朕心<sub>一</sub>」（朕が屢々法乳を沾し、朕の心は明らかにある）という句からも知られるように、龍溪に嗣法し、龍溪を通じて隱元に参禪し、自己も黄檗の法系に連なったことに対し、謝恩の念を表明している。

こうした法皇と隱元との間の法語・書簡のやりとりから、二人が互いに尊崇の念を持ちつつ強い結びつきを得ていたことが知られる。

寛文6（1666）年6月29日、法皇は仏舎利五顆を宝塔に納めた上で、隱元に賜った。隱元はこの仏舎利の由縁について、弟子の高泉性激に『黄檗山御賜佛舎利記』<sup>(55)</sup>を書かせた（以下、『仏舎利記』と略称）。この『仏舎利記』によれば、こうして黄檗山萬福寺に祀られた仏舎利は、もともと中国における律宗の大成者・道宣律師の所蔵であったが、のち、道宣の再誕といわれる源実朝が見た夢によって日本へ将来され、大慈寺、円覚寺、鹿王院と奉安の地を換えついでこんにちまで供養され、日本にあって既に四百年にわたり崇拝を受けている。法皇はそのうち十顆を入手したが、さきに内宮の火災により五顆しか残らなかった。加えて法皇自身が老齢に入り、自己なきあといかにこれら貴重な仏舎利を奉安すべきか、憂慮するに至った。『仏舎利記』に「今上皇自念年老、恐有遺失、故舎予焉。」<sup>(56)</sup>とある叙述がそれである。そこでこれを隱元に託したのである。まず同年11月、法皇は黄金を下賜し、黄檗山に舍利殿を建てさせた。仏教のシンボルとしての仏舎利やそれを祀る舍利殿を建てるための費用を喜捨したという点からも、法皇が日ごろいかに深く隱元を信頼し、帰依していたかが窺われる。ただ、高井恭子氏がさきに指摘したように、萬福寺の舍利殿で行

われている「仏舍利瞻礼」の儀礼は、「後水尾上皇の仏舍利をただ供養するためだけに行われたものなのではなく、隠元開宗の正統性、日本における禅宗の一統、日本が行う「礼」の正統・一統性といったものを誇示するために行われたと見ることができる<sup>(57)</sup>」。法皇は自己の黄檗宗への帰依、舍利や舍利殿の下賜といった具体的な行動を通じて、釈迦の教えを受け継いでいる隠元の法脈の持つ正統性を認めている。

以上を再度まとめてみると、法皇にとって、隠元は日本の達磨（禅宗初祖）のような存在である。そして法皇は、隠元の伝えた臨済正宗に法脈上の正統性を認めているだけでなく、自己もまたその法脈を受け継いだことを誇りとしている。そのうえで、隠元の渡来によって日本の衰微していた禅界が再興されたことを高く評価している。その一方で、隠元にとって、自己が日本で弘法することができるのもひとえに法皇からの庇護のおかげである。法皇をはじめとする皇室や幕府からの支援により、黄檗山開創のときを迎えることができ、かつ、龍溪ら和僧が嗣法したことにより、中国臨済禅の法脈が日本で受け継がれてゆくこととなった。しかし、隠元からすれば、そのすべては単なる偶然ではなかったのである。三平瑞木像が感応道交により日本へもたらされたように、自己の日本での弘法も同様にして見守られ、伝法の正統性が承認されたことを隠元は深く信じている。隠元が三平瑞木像を法皇へ献上した理由は、私的には仏舍利を下賜されたことへの謝恩や法皇への加護を祈るという意味をもつ。その一方で、公的に法皇への深い信頼や期待を込めて、三平瑞木像からの見守りにより、中国の臨済正宗の法脈だけでなく、さきの謝偈に「灯灯相統、萬古三平」とあることから知られるように、三平祖師信仰自体もまた異国日本でも永遠に伝承されてゆくことを願っていることがうかがえる。

## 6. 法皇が三平瑞木像を泉涌寺に安置する

本章では、前述した新出資料『三平山瑞木記并偈頌』の中から、隠元の弟子・南源性派の撰述した「三平瑞像頌」の引（小序）の後半を取り上げておこう。

ここでは、法皇がこの像を泉涌寺に安置させた経緯も記録されている。

(前略) 派等再拜敬、如<sub>レ</sub>命<sub>レ</sub>賚上。皇情大悦、礼敬日加。越明年、勅<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>東山泉涌寺右岡<sub>一</sub>、特建<sub>二</sub>宝殿<sub>一</sub>以崇安、云<sub>レ</sub>經始<sub>二</sub>于桂秋中浣<sub>一</sub>、落成<sub>二</sub>于霜月下句<sub>一</sub>。奏功之速、結構之雄、皆我法皇不思議智之力、從<sub>二</sub>一念<sub>一</sub>而感發也。(中略) 延宝二年歲在甲寅仲冬華歲沙門南源派敬書。(返点・句読点筆者)

南源たちは隠元の指示したように、像を法皇へ献上した。本像を受け取ることで「皇情大悦、礼敬日加」という句からも知られるように、法皇はいよいよ尊崇を加えるに至った。本像奉安の翌延宝2(1674)年、泉涌寺には専用の宝殿が建立され、そこに本像が安置された。宝殿は8月中旬から起工され、11月の下旬に落成した。また、江戸中期に成立した泉涌寺高僧の新出伝記史料である「天圭和尚并湛慧長老伝」によれば、本像の泉涌寺安置に関して、以下のような記録がなされている。

(前略) 延宝二年、上皇命<sub>レ</sub>師<sub>レ</sub>翹建<sub>二</sub>一堂于本山遷内<sub>一</sub>、護<sub>二</sub>持三平瑞材釈迦文佛<sub>一</sub>。原隠元師所献。事縁具、師唱<sub>二</sub>導其文<sub>一</sub>曰、夫鷲嶺現放<sub>レ</sub>光也、東方收因鶴樹垂顧命也、北極受<sub>レ</sub>囑、金湯有<sub>レ</sub>主、則像教得<sub>レ</sub>處矣、謹奉安<sub>二</sub>座<sub>一</sub>。牟尼瑞相示<sub>二</sub>非常踪乘<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>請願始<sub>二</sub>於異域<sub>一</sub>也。禱<sub>二</sub>三平禪祖九百年後枯檜如<sub>レ</sub>生<sub>一</sub>、効<sub>二</sub>于填聖王八十種好<sub>一</sub>、刻<sub>レ</sub>檀同儀徂秘<sub>二</sub>漳中<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>傳<sub>二</sub>海外<sub>一</sub>、爰有<sub>二</sub>来朝師<sub>一</sub>、隔五千里而忽召<sub>レ</sub>感、遂獻<sub>二</sub>太上皇<sub>一</sub>、安<sub>二</sub>九重城<sub>一</sub>而充<sub>二</sub>供養<sub>一</sub>、是聖德所致、又妙応所及也。(後略)(返点・句読点筆者)

延宝2(1674)年、法皇は「師」に命じて泉涌寺で一堂を建立して、三平瑞材釈迦文仏を護持することを命じた。ここにいわゆる「師」とは、泉涌寺の当時の住持であった天圭照周を指す。また、「三平瑞材釈迦文仏」とは、本像(黄

檗宗史料にいう「三平瑞木像」を指す。天圭は唱導文において、臨終の隠元がこの像について法皇へ後事を託し、法皇もまたよく委嘱を守り、この像を専用の殿堂に安置して仏事を行わせたのである。この史料にあっても、本像の由来は特別であることが記されている。「三平禅祖」、すなわち義忠が植えた檜は九百年ののちも見かけは枯れつつ、なお生命を保っているかのようであり、それを材料として仏像が彫刻された。ただ、その多くは福建省漳州に秘蔵され、海外へは伝わっていなかった。ところが今、日本に渡来した師、すなわち隠元がいて、ここに本像は五千里も離れた地からその師と本像との感応道交により日本へもたらされた。これを法皇に献じ、皇居で供養されたのは単に天子の聖徳のおかげであるのみならず、妙応（仏の持つ不思議な働きが顕現すること）の致す所でもあろう。このように黄檗唐僧（隠元・南源）と日本人非黄檗宗僧侶（天圭の行状）それぞれの遺した記録を通じ、いずれも本像が不思議な感応（感応道成・感応道交）によってもたらされたことが強調されている。そのため、本像を安置する宝殿もまた「妙応殿」と名付けられたのである。<sup>(72)</sup>

それではなぜ、法皇は本像を泉涌寺に安置させたのか。それは泉涌寺自体のもつ、皇室の菩提寺としての特性もさることながら、法皇自身がその青年期以来の仏教への帰依や近世泉涌寺の再建事業などとも深く関わったことにも因つていよう。

『泉涌寺史 本文篇』<sup>(73)</sup>や西谷氏の近年の論攷<sup>(74)</sup>によれば、泉涌寺は鎌倉時代初期に俊苧律師（1166-1227）により創建された。俊苧は入宋ののち、律を中心として、天台・禅・浄土など主要各宗の教義を学び、留学十二年ののち帰国した。そして、宋の伽藍形式ののち、この泉涌寺を建立した。その際、彼は宋代の文化や仏教の新風を伝えることと、日本の戒律を復興することを主たる目標として尽力した。仁治3（1242）年、伽藍营造に支援を惜まず、それがために俊苧の再誕と見なされた四条天皇の葬送儀礼が泉涌寺で行われ、新御堂が四条天皇の墓所として営まれた。その結果、泉涌寺と皇室との間に、深い縁が結ばれることとなった。また、葬送以外にも、泉涌寺長老による宮中への

仏牙持参、授戒や祈雨法要などを通じて、泉涌寺は天皇家・朝廷と関係を持っていた。江戸初期の後光明天皇の時から、儒礼を尊んだその遺志により、葬送形式が火葬から土葬へと改められ、泉涌寺は単に葬送儀礼の場であるばかりでなく、天皇の玉体が埋葬される墓所ともなり、天皇家の唯一の菩提寺「御寺」として位置づけられた。

応仁の乱に際し、泉涌寺の堂宇も全焼した。以後、元亀年間（1570-1573）までに、ある程度再建されたようであったが、再び戦火によって焼失してしまう。世の中がようやく落ち着いた寛文年間（1664-1669）ので、泉涌寺は法皇によって積極的に推進された再建支援により、加えた幕府からの助力や、寺自体による勧進活動といった力量が組み合わさった形で復興された。法皇は寛永6（1629）年の譲位後、政治からは遠ざかり、和歌や花道など文化の面へ大きな関心を寄せ、かつ実践した。のみならず、仏教、特に禪にも傾倒し、多くの禅僧へ深く帰依している。また、泉涌寺以外にも皇室とゆかりの深かった他寺院へ寄進し、久しく廃絶していた法会を復活した。かくて、近世の宮廷文化や仏教の復興に大いに貢献したのである。泉涌寺もむろんその例外ではなく、法皇の外護によって、いわゆる「寛文大造営」が行われ、観音堂などいくつかの堂舎が泉涌寺内で増築されている。法皇に献上した三平瑞木像を安置した宝殿は、実にその延長線上にあった。法皇が本像を重視し、新たに建立した宝殿へ安置・供養したのである。その理由は、法皇自身が敬愛していた隠元自身が渡日後も保持していた故郷の信仰を、師の隠元と同様に敬い、その信仰に込められた中国文化を保持し、隠元の説いた「灯灯相続、萬古三平」という中国の民間信仰を、弟子たる法皇自らも日本で受け継いでゆこうという意志をいだいていたからにほかなるまい。このように、法皇が信仰の伝承を重んじたという点からも、隠元に深く帰依していた、ということが改めて窺われる。そればかりでなく、本像が妙応殿に安置されてのち、黄檗僧の木庵・慧林・南源・独吼らもこの像を拝し、それぞれに詩偈を残している。この点については、西谷功氏も既に指摘しているように、黄檗ゆかりの法皇が泉涌寺へ下賜した本像を、黄

檜僧が来山礼拝するという交流を通じ、同じく戒律を重視していた泉涌寺僧との間に、さらに親交を深めようとする意味合いが込められていよう。<sup>(76)</sup>この点に関して、関連する第一次史料を読み解くことにより、さらに考察する余地がある。今後の課題としたい。

## 7. 終わりに

本稿の主旨は、三平瑞木像をめぐる、その像の姿や由来、三平祖師信仰との関わりを考察し、さらに進んで隠元の三平祖師信仰、法皇への献上、泉涌寺への下賜安置といった経緯についても考察を加え、法皇と隠元の関わりを持つ、これまであまり触れられて来なかった一面を明らかにすることにある。

冒頭に述べたように、三平瑞木像とは、唐代の名僧・義忠手植えの檜の老木から彫刻された釈迦如来坐像である。本像自体、福建における三平祖師信仰と深い関わりを有している。また、隠元も福建に生まれ育った関係上、ごく自然な形で三平祖師信仰をいだいており、渡日後も、有力信徒から海を隔てて寄贈されたことをきっかけに、一層その信仰を維持しつつあった。隠元は本像を念持仏として供養し、自己の日本での弘教が見守られ、祝福されているものと確信していた。そして示寂に先立ち、隠元は自己の法脈を受け継いでいる法皇へ本像を献上している。そこには、中国における臨済宗の正統な法脈（臨済正宗）のみならず、故郷福建ゆかりの三平祖師信仰をも、本像を象徴として日本で綿々と伝承してゆくことを隠元が法皇に期待していたことが窺われよう。本像を受領した法皇は、隠元を尊崇するために、皇室と関わりが深い泉涌寺へ本像を奉安することを決め、そのための専用施設たる妙応殿を建立したのである。

本稿が概観・考察したのはおよそ以上のとおりである。しかし、三平瑞木像が泉涌寺に安置された後の事情については、今度さらに調査・考察する余地がある。具体的には以下の三点をめぐるである——(1) 法皇は隠元及び黄檗僧へいかなる原因からかくまで深い帰依を示したのか、ということ。次に、(2) 法皇の帰依した複数の禅僧の中で、隠元及び黄檗僧はどう位置づけられたか、

という二課題と関連して、三平瑞木像などを通して、法皇と隠元及び黄檗僧の関わりをさらに考察する。そして、(3) 龍溪自身が、その生前、泉涌寺との間にどのような縁故を結んでいたか、ということである。法皇と龍溪との深い道縁から見て、生前の龍溪が泉涌寺との間に相当な縁故を結んでいたであろうことは、高泉性激のような龍溪ほどには法皇・泉湧寺との道縁を得なかった黄檗僧の例から見て<sup>(77)</sup>も想像に難くない。ただ、現在までのところ、関連する史料を見いだせていない<sup>(78)</sup>。これらについては、今後の課題としたい。

## 注

- (1) 龍溪性潜は妙心寺の前住持であったが、寛文4(1664)年、龍溪性潜が隠元に嗣法して黄檗僧となつてのちは、妙心寺歴代の中から削除されている。
- (2) 許欽台(生没年不詳):福建省泉州(今泉州)の出身、鄭成功の幕僚である。隠元に深く帰依し、寛文2(1662)年、隠元から法号「得一」を授けられ、黄檗僧の一人となった。隠元渡日の路線は彼が用意したものと推測されている。林観潮「隠元と鄭成功との関係について」(『黄檗文華』(122)黄檗山万福寺文華殿、2003年、113頁)を参照。
- (3) 『黄檗宗派原由』(黄檗山万福寺、1907年)。倉光活文「皇室と黄檗宗」(『瞎驢眼』59号、黄檗山、1915年)、同「後水尾法皇と隠元禅師」(『禅宗』第264号、貝葉書院、1917年)。近藤瑞堂「皇室と黄檗宗との関係」(『護法』第33年第3号、鴻盟社、1917年、京都宇治黄檗山万福寺文華殿所蔵)。辻善之助「後水尾天皇の御信仰」『日本佛教史 第八卷 近世篇之二』(岩波書店、1953年)、同「黄檗の開立」『日本佛教史 第九卷 近世篇之三』(岩波書店、1954年)。中尾文雄『後水尾法皇と黄檗宗』(黄檗山、1979年)。林観潮「隠元隆琦と日本皇室—『桃葉編』を巡って」(『黄檗文華』(123)、黄檗山万福寺文華殿、2004年)。
- (4) 『黄檗文華』129号、黄檗山万福寺文華殿、2010年。
- (5) 『大法輪』79(12)、大法輪閣、2012年。
- (6) 錦織亮介『黄檗禅林の絵画』(中央公論美術出版、2006年)254～255頁。
- (7) 浜松市博物館、2014年。39頁。

- (8) 九州国立博物館、2011年。230頁。
- (9) 図録『浜松にもたらされた黄檗文化』によれば、高さは26.6センチメートルとし、一方、図録『黄檗 京都宇治・萬福寺の名宝と禅の新風』では26.2センチメートルとしており、若干の相違を見る。本稿では説明がより詳細な図録『浜松にもたらされた黄檗文化』（前掲注(7)）による。
- (10) 「三平瑞像」には計五つの版本がある。本稿では、『新纂校訂 隠元全集 第五卷』（開明書院、1979年、以下、『隠元全集』と略称。全巻同年中に刊行）2434～2436頁に拠った。その底本は『黄檗和尚扶桑語録』（寛文版）（常滑市・龍雲寺蔵本）である。
- (11) 八十種好：仏の身に備わる、それとはっきり見ることのできない微細な八〇の特徴。類似概念の「三十二相」に比して。より微細な特徴である。
- (12) 西方教主：西方浄土の教主である阿弥陀如来。
- (13) 十六観門：『観経』に説かれた、極楽往生を願う人が行ずべき計十六種の観想の法門。
- (14) 南靖：中国福建省漳州市に位置する県。
- (15) 明・永暦3（1649）年。
- (16) 明暦元（1655）年。
- (17) 中左：現在の福建省廈門市。
- (18) 平久保章編『新纂校訂 隠元全集 第五卷』（前掲注(10)、以下同）2434～2436頁。本稿にあつては『隠元全集』からの引用に際しては、同『全集』の影印底本に見る返点に従った。ただ、送り仮名は煩を避けて省略した。原文では句読点が用いられていないので、文意を汲んで補った。さらに、複合動詞用の返点「(二) -」は原文に見えず、これも筆者が今回補った。以下、『隠元全集』からの引用についてはすべて同様とする。
- (19) 義忠の生涯については、以下の諸文献を参照——唐の王諷の「漳州三平大師碑銘並序」（『唐文粹』巻64、『全唐文』巻791所収）、永井政之「三平義忠考—現地資料によってその信仰の成立と展開を考える」（『宗教学論集（19）』駒沢大学宗教学研究會、1996年）、林国平、彭文宇『福建民間信仰』（福建人民出版社、1993年）。なお、義忠の年齢に関しては、『唐文粹』も『全唐文』もともに、その出生年代を明示していない。しかし、『唐文粹』では92歳と

書かれており、また、『全唐文』では91歳と書かれている。本稿では『唐文粹』に見る92歳説に拠った。

- (20) 林国平、彭文字『福建民間信仰』（福建人民出版社、1993年）（中国語）1～15頁。
- (21) 同前。263～281頁。
- (22) 永井政之「三平義忠考—現地の資料によってその信仰の成立と展開を考える」（前掲注（18））。311～328頁。なお、本段落の「 」内の字句は、永井教授が上記論文において中国語原史料から日本語訳されたものに拠った。今後別の機会に、逐一原文を参照しつつ、筆者の見解をも提示したい。
- (23) 顔亜玉「閩南三平祖師信仰的形与發展演變」（『世界宗教研究』、2001年）、（中国語）。
- (24) 慈蔭：仏や神の庇護。
- (25) 瞻礼：仏祖の像を仰ぎみて礼拝すること。
- (26) 徹證：物事の真実を見きわめること。
- (27) 無生：生ずることがないこと。一切の現象は空であるから、そこに生滅の變化はないという考えによる。
- (28) 平久保章編「黄檗和尚扶桑語録」『隱元全集 第五卷』2435～2436頁。
- (29) 総合佛敎大辞典編集委員会『総合佛敎大辞典』（法藏館、1987年）226頁。
- (30) 温陵：福建省泉州市の別称。
- (31) 精嚴：くわしく嚴格なこと。こまやかでおごそかなこと。また、そのさま。
- (32) 化功：教化のはたらき。教化の功德。
- (33) 『三平山瑞木記并偈頌』（2卷）（「泉涌寺文書」E46-1.2）。
- (34) 熊倉功夫『後水尾院』（朝日新聞社、1982年）。辻善之助『日本佛敎史 近世篇之二』（前掲注（3）、以下同）。
- (35) この『隱元録』とは、崇禎15（1642）年開版の『黄檗隱元禪師語録』を指す。
- (36) 平久保章『隱元』（吉川弘文館、1962年）117～118頁。
- (37) 『黄檗宗鑑録』（黄檗宗務本院、1936年）3頁。
- (38) 平久保章編『新纂校訂 隱元全集 附録』所収。
- (39) 同前。5243頁。
- (40) 平久保章編『新纂校訂 隱元全集 第七卷』所収。

- (41) 同前。3257 頁。
- (42) 中尾文雄『龍溪禪師の生涯と思想—『龍溪和尚語録』研究ノート』（九島院蔵版、2000 年）162 頁。大槻幹郎「龍溪禪師関係年表」『祥雲山慶瑞寺：龍溪禪師三百三十年忌記念』（祥雲山慶瑞寺・寺坂道雄発行、2000 年）220 頁。
- (43) 『黄檗宗派原由』（前掲注（3））。16 頁。
- (44) 辻善之助「後水尾天皇の御信仰」『日本佛教史 第八卷 近世篇之二』（岩波書店、1953 年）446 頁。
- (45) 同前。444～445 頁を参照。
- (46) 『黄檗宗鑑録』（黄檗宗務本院、1936 年）4 頁。
- (47) 林観潮教授の先行研究によれば、以下のとおり——「日本明暦 4（1658）年 6 月、摂津普門寺に住した隠元は、明の三峰法蔵（1573-1635）の編纂した『弘戒法儀』33 章の中から 14 章を選び、別に 1 章「堂頭和尚方丈付衣法儀」を加えて 15 章とし、新たに『弘戒法儀』編纂したのである。」（林観潮「隠元和尚の禅風」『黄檗文華』（138）黄檗山万福寺文華殿、2018）234 頁。
- (48) 中尾文雄『龍溪禪師の生涯と思想—『龍溪和尚語録』研究ノート』（九島院蔵版、2000 年）194 頁。
- (49) 辻善之助「後水尾天皇の御信仰」『日本佛教史 第八卷 近世篇之二』、446 頁。
- (50) 辻善之助「黄檗の開立」『日本佛教史 第九卷 近世篇之三』（前掲注（3）、以下同）371～373 頁。
- (51) 平久保章編『隠元全集 第七卷』3236 頁。
- (52) 平久保章編『隠元全集 第十卷』5054 頁。
- (53) 辻善之助「黄檗の開立」『日本佛教史 第九卷 近世篇之三』、373～374 頁。
- (54) 平久保章編『隠元全集 附録』5461～5465 頁。
- (55) 平久保章編『隠元全集 第七卷』3467～3472 頁。
- (56) 同前。3471～3472 頁。
- (57) 高井恭子「黄檗山万福寺における仏舎利供養について—「法皇忌」との関係から」（『黄檗文華』（121）黄檗山万福寺文華殿、2001）46 頁。
- (58) 経始：物を造ること。また、家屋を建てはじめること。土木を興すこと。
- (59) 桂秋：8 月の異称。
- (60) 中浣：（「浣」「澣」は洗う意。中国、漢・唐時代の制で、朝臣が一〇日ごとに

帰休し、沐浴したところからいう)月のなかばの10日間。11日から20日の間。  
中旬。

- (61) 霜月：11月の異称。
- (62) 『三平山瑞木記并偈頌』(2巻) (「泉涌寺文書」E-46-1.2)。
- (63) 『天圭和尚并湛慧長老伝』(1巻) (「戒光寺文書」F-02)。
- (64) 收因：結末。
- (65) 顧命：臨終に遺言すること。遺言して後事を託すること。
- (66) 北極：北極の尊：天子をいう。
- (67) 金湯：金城湯池。きわめて守りの堅い城と堀。転じて、他から侵害されにくい所。
- (68) 像教：一般には正像末の三つの時代のうち、像法時代の教えを指すとされ、仏の教・行・証のうち前二者が残っている状態をいう。ただし、この用例にあっては、単に「仏像と教法」という意味であろう。
- (69) 安座：仏像を奉じて殿堂に安置する仏事。
- (70) 九重城：中国漢朝以後、皇居を指す。
- (71) 『天圭和尚并湛慧長老伝』(1巻) (「戒光寺文書」F-02)。
- (72) 総本山御寺泉涌寺編集『泉涌寺史 本文篇』(法藏館、1984年) 389頁。
- (73) 同前。
- (74) 西谷功「近世泉涌寺の再建—伽藍復興と精神の回帰」(『黄檗文華』(129) 黄檗山萬福寺文華殿、2009) 156～177頁。
- (75) 『三平山瑞木記并偈頌』(2巻) (「泉涌寺文書」E-46-1.2)。
- (76) 西谷功「近世天皇家の念持仏—泉涌寺奉安の仏像を中心に」(『大法輪』79(12)、大法輪閣、2012年)。130頁。
- (77) 野川博之『明末仏教の江戸仏教に対する影響』(山喜房佛書林、2016年) 308頁。
- (78) 龍溪には七言絶句「礼<sub>レ</sub>瑞像<sub>一</sub>」がある。原文は「三平瑞像也奇哉。靈感古今知幾回。一道神光東照後。数尊化仏歩<sub>レ</sub>虚来。」中尾文雄『龍溪禅師の生涯と思想—『龍溪和尚語録』研究ノート』(前掲注(42)参照) 43(訓読)・94頁(原文)。ただし、その前後に置かれた他の作品を見る限り、本作品は龍溪が京都郊外の黄檗山で隠元に侍していた当時のものであり、その直後に龍溪が寛文4(1664)年1月、近江正明寺へ赴任する際の詩偈計3首が置かれている、し

たがって、本作品は、隠元と主要な弟子ら黄檗唐僧が、海を越えて日本へ伝えられた本像を前にした際の驚喜を知るうえでは重要な史料であるが、龍溪と泉涌寺との縁故を知るための史料とすることはできない。

## 謝辞

本稿は令和2年度禅学研究会第91回学術大会における口頭発表に基づいております。発表の席上及びその前後にご教示、ご鞭撻を賜った諸先生方へ深謝申し上げます。また、本稿の執筆にあたり、泉涌寺様、戒光寺様、萬福寺様より資料掲載のご許可を頂きました。またアドバイスを頂いた泉涌寺心照殿学芸員の西谷功先生、京都宇治萬福寺文華殿主管・田中智誠師、元台湾法鼓文理学院の野川博之先生に深謝申し上げます。